

地域日本語教育をどのように記述するか

—他者を理解する質的方法—

Conducting Research on Japanese Language Education in a Community:
Qualitative Research Methods Understanding Others

八木真奈美（早稲田大学）
YAGI Manami (WASEDA University)

要 旨

本稿では、地域の日本語教育を記述する重要性を指摘した上で、記述の際にはどのようなアプローチが適切かという議論を行う。そして、その答えとして、質的調査法の一つであるエスノグラフィーを取り上げ、フィールドノーツの書き方及びデータの分析方法について、具体例を交えながら紹介する。

This paper first highlights the importance of research on regional Japanese community classes that teach the Japanese language to non-native speakers and subsequently presents appropriate approaches to conducting the research. Further, this paper suggests that ethnography may be used as a method to understand the issues that learners face. In addition, it discusses the importance and method of taking field notes. The data analysis methods have also been discussed with the help of examples.

【キーワード】 地域日本語教育，質的調査法，エスノグラフィー

1. はじめに

近年、質的研究への世界的な関心の高まりを受けて、日本語教育研究においても質的調査法を用いた研究を見かけるようになった。これは、昨今の学習者の多様化や日本語教育が社会に果たすべき役割の変化が背景にあるのではないかと思われる。学習者の多様化の一因として1990年代以降の在日外国人の増加による地域日本語教育の広がりがある。日本語教育が大学や日本語学校以外の場に広がったことに伴い、地域日本語教育の実践に関わる研究が数多くなされ、その成果として、地域の日本語教育ネットワークの充実やボランティアの養成、教材の研究・開発などが進められてきた。

だが、一方で地域の日本語教育実践に従事している者の多くは、教師や研究者でない場合が多いため、地域の在日外国人の状況をよく知り、直接声を聞くことの出来る支援者の貴重な経験が、十分に地域日本語教育の調査研究に反映されているとはいえない。そこで、本稿では、多文化共生社会の最前線にいる地域の支援者が、自らの実践を記述し、発信するためには、どのようなアプローチをとればいいのかについて述べていく。具体的には、まず、なぜ、地域の実践を記述する必要があるのか、そして、記述するにはどのような方法が適切なのかについて述べ、次に、その方法の一つとしてエスノグラフィーを紹介する。最後に、このようなアプローチをとることによって期待される研究の広がりについて言及する。

2. 他者の理解や活動の意味を探索する質的方法

地域日本語教育を記述する方法について、地域の支援者の話と筆者の経験を基に、なぜ、記述するのか、そして記述する際にはどのような方法が適しているのかについて以下に述べる。

筆者は2010年10月から2011年3月にかけて、地域日本語教室の支援者に聞き取り調査を行った。その中で何人かの調査協力者が、教室を通して知り合った外国籍住民について語ってくれた。たとえば、友だちからの電話に親が出ることを拒む子どもの話、高齢になってから移住し、日本語がわからないので、自分の近くで誰かが話をしていると、いつも自分のことを話しているのではないかと思ってしまうという話、仕事を辞めると言ったら給料から次の人を探す広告料が引かれていたという話等々、まさに、地域の教室だからこそ、知る事の出来る現実がそこにあると思われた。筆者は、約10年前から、地域に住む移住者の調査を行ってきたが、その中で、たとえば、移住してきた中学生が学校の同級生に国に帰れと言われ学校を辞めた、あるいは、成人の移住者でも、仕事場でいじめにあったり、面と向かって悪口を言われたりなど、さまざまな「理不尽」な出来事を見聞きした。地域の支援者や筆者が見聞きしていることは、日本語が上手になる、あるいはならないという以前の、しかし、多くの日本語教育関係者や日本人に知ってもらいたい現実だと筆者には思われた。

だが一方で、移住者は決して受け身的な存在だとは言えない。たとえば、地域日本語教室で母語を使って友だちを作り、自分の世界を広げている人（八木, 2010）や、水泳という自分の特技を活かして、コミュニティの中での自分の居場所を構築した人（八木, 2004）など、逆にこちらが生きる力をもらえるような人もいる。これらは、単に見聞きする現実ではなく、そのフィールドに入って、長い時間をかけて移住者と向き合い、丁寧に記述していく中で、理解された現実である。そして、これらの物語もまた、多くの人に理解してもらいたいと思う。

多文化共生社会とは、文字通りに言えば、さまざまな文化的背景を持つ人々が共に住む社会のことであろう。同じ国の人も含め、自分とは異なる背景を持つ人と関わり合いながら、より良い社会を築いていこうとすれば、まず相手を理解しようと努めなければならないはずである。理解の方法は一様ではないだろうが、自分と異なる文化的背景をもつ人が、日本社会でどのような経験をし、また日本語を使うことや学習することにどのような意味を見いだしているかを理解することは、地域日本語教育の支援体制の充実と共に大変重要なことである。

では、人はどのように他者の経験や意味付けを理解するのであろうか。人間の経験や意味生成は、直接観察できる「物」ではない。そのため我々は日常、物語（narrative）の形式—個人や社会の歴史、おとぎ話、小説、日常の会話など—で、自分自身や誰かの行動を説明したり、その行動を理解したりしている（Polkinghorne, 1988）。したがって、物語の形式で記述することによって、経験や意味付けを理解し、人に伝えることが可能になるのである。では、ここで言う物語の形式とはどのようなものか、次節で述べていくことにする。

2-1. 知り方の二つの様式

ここでは、物語の形式について説明するために J・ブルーナーの二つの知り方の様式を紹介する。ブルーナー (1998) は、何かを知る際の「知り方の様式」には二つあると主張した。一方の様式は「もしも X ならば、Y となる」というような論理的命題で、普遍的な真理の条件の探究を目的とするものである。もう一方は「王が死んで、そしてそれから王妃が死んだ」というような昔物語で、二つの出来事のあいだのいかにも起こりそうな特定の関連の探究を目指すものである。この二つの様式の特徴として、前者は論理—科学的様式で、記述や説明に関する形式的な数学的体系の理念を実現するため、カテゴリー化、ないしは概念化を用い、カテゴリーが確立され、例証され、理念化され、互いに関連づけられて、ひとつの体系を形成するというアプローチを用いる。一方、後者は物語様式で、みごとなストーリー、人の心をひきつけるドラマ、信じるに足る歴史的説明などをもたらす。人間の意図および行為、そしてそれら成り行きを示す変転や帰結を問題にする。真理をもたらすのではなく、真実味をもたらすとされる。

日本語教育研究を考えるならば、どちらの「知り方」も成り立つであろう。少し単純化するが、たとえば、ある試験の受験者が使っていたテキストや学習方法を調査し、テキストや学習方法と試験の結果に何らかの因果関係があるかどうかを知りたい場合、それは、おそらく前者の範疇に入るだろう。一方、ある教室の参加者が、テキストや学習の方法についてどのように捉えているかを知りたいというような場合には、おそらく後者の様式を採用することとなるだろう。そして、地域に住む移住者の経験や、地域日本語教育実践の活動の意味を知りたいという研究もやはり、後者のアプローチを採ることが適切だと筆者は考える¹。

2-2. エスノグラフィー

前節で、知り方の二つの様式を紹介したが、ここでは、その具体的な調査方法として、エスノグラフィーを紹介する²。エスノグラフィーという用語は、「調査法であり、また記述や論文など調査によって書かれたもの」(Denzin, 1997: Introduction, 11 筆者訳)の両方の意味で用いられる。したがって、エスノグラフィー(調査法)を使って調査をし、その結果をまとめたものもまた、エスノグラフィーと呼ばれる。

エスノグラフィーの起源は文化人類学で、20世紀初頭マリノフスキー³がエスノグラフィーの特徴である参与観察によるフィールドワークを最初に明確な形で打ち出したとされている(Rabinow, 1985-Tedlock, 2000: 457からの引用)が、現在では、文化人類学だけでなく、さまざまな分野—教育、看護および医療分野、ビジネス、科学技術分野、人文地理学、社会心理学、文化研究およびメディアスタディーズなど(Atkinson, 2001 筆者訳)—で用いられている研究方法である。

分野により、その実践はさまざまであるが、本稿ではエスノグラフィーを「自然なセッティングやフィールドにおいて、研究者が直接的にフィールドに参加して、人々の日常の活動や社会的意味を捉えるという方法による人の研究(Brewer, 2000: 10) 筆者訳」と定義する。そして、この定義を踏まえた上で、人々の日常の活動や社会的意味を「捉える」だけではなく、さまざまな文化的背景をもつ人が、日本社会でどのような経験をし、また日本語にどのような意味を見いだしているかを理解するために、「個人が自分自身の社会と文

化的世界をどのように見て、どのように参加しているのかを深く理解する」(Harklau, 2005: 179 筆者訳) 調査法であるという点を付け加える。また、最後に重要なこととして、質的調査法の一つであるエスノグラフィーは、フィールドワークのテクニックや、調査・分析の手続き的なルールを示すだけでなく、たとえば「真実とは何か」や「研究者の立ち位置」、「表象の問題」など、存在論や認識論など、研究に対する見方をも含むものを指す(Wolcott, 1999, Brewer, 2000)⁴という立場を筆者はとっている。

定義にあるように、フィールドの参加と観察がエスノグラフィックな調査の特徴である。具体的なデータ収集方法としては、参与観察によるフィールドノーツの記述があげられる。フィールドノーツは、テーマに関わると思われることを探して書くのではなく、フィールドで起こっている出来事や、そこに登場する人物の行動や話、人や物の様子など、フィールドで見たこと、聞いたことをすべて書くことで「厚い記述(thick description)」(Geertz, 1973)につながる。だが、すべてを書くと言っても、通常フィールドの中で詳しいフィールドノーツを書くことはできないため、筆者の場合は、メモをとれる時はとるが、とれない時は、その場でできるだけ記憶にとどめるように努め、帰宅してから時間をとって書くようにしている。また、多くのケースで、フィールドノーツだけでなく、他のデータ収集方法(インタビュー、資料や写真、ビデオ撮影など)も併用されており(Atkinson, 2001)、フィールドに関係するすべてのものがデータとなるとされている。筆者の過去の調査では、調査に使うことの承諾を協力者から得た上であるが、フィールドノーツ、インタビューの文字化データ、地域日本語教室での学習の際、使用した学習ノートや教室で配布された資料、協力者の学習日誌、協力者と一緒に出かけたイベントのチケット、協力者がくれた年賀状などがデータとなった。

次節では、実践研究フォーラム当日のラウンドテーブルの流れに沿って、データの分析方法について述べていく。

3. エスノグラフィーの調査法

実践研究フォーラムのラウンドテーブルでは、エスノグラフィーという調査法を体験してもらうため、各参加者が、フィールドノーツを書き、そのデータを分析、最後に、グループで分析結果を発表してもらった。具体的なフィールドノーツの書き方や分析の方法については、パワーポイントの資料を示しながら筆者が説明した。ここではその資料を示しながら、エスノグラフィーの調査法について述べていくことにする。

3-1. 本ラウンドテーブルの体験

当日の作業の手順と説明は以下の通りである。

1) フィールドに入る：

実際のフィールドに出向くことは出来ないため、ある教室の様子を撮影したDVD⁵を視聴した。参加者は、その教室をフィールドと想定し、参与観察を行った。

2) フィールドノーツをとる：

参加者は、自分が実際にフィールドにいると仮定して、映像を見ながら、フィールドノーツを書いた。実際に調査を行う場合、フィールドで起こることはその場の一回限りであるため、DVDの視聴も一回のみとした。

3) フィールドノーツをデータとして分析する：

分析の際はテーマが必要なため、当日のラウンドテーブルでは、便宜的に、「第二言語で生活する経験とは話者にとってどんな意味をもつか。」という大きめのテーマを設定した。他のテーマがよりいいと思われる場合や、サブテーマが必要だと思われる場合は、各グループの判断で決めてもらった。

分析からエスノグラフィーを書く（ラウンドテーブルでは発表）までの作業は、一直線に進行するというものではないが、時間軸に沿ってそのプロセスを示すとすれば、以下の図のような3段階となる。

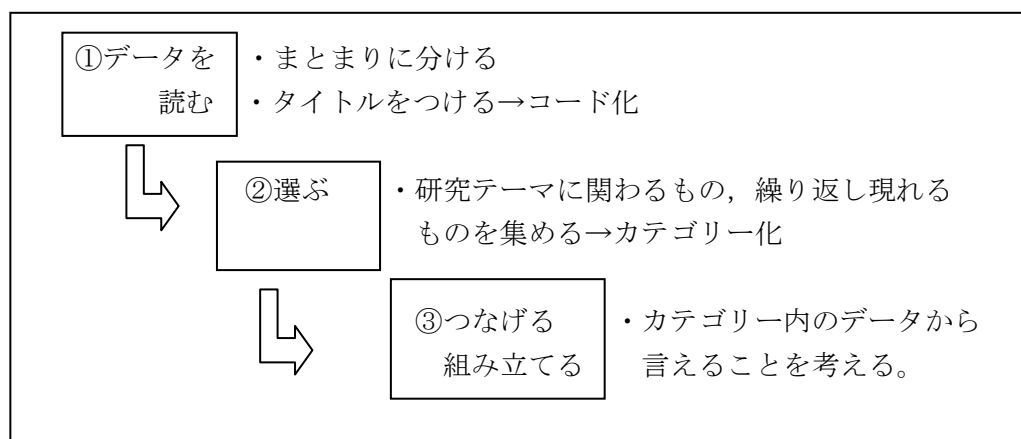


図1：分析のプロセス1

①データを読む：

全ての1次データ⁶を何度も読み、内容のまとまりという観点からデータを分けていく。一つのまとまりがフィールドノーツやインタビューデータの1行の場合もあるし、何行にも及ぶ場合もある。次に、そのまとまりを表すタイトルをつける。タイトルをつける際、筆者は、不用意に内容を抽象化してしまうことを避けるため、でき得る限り協力者の言葉から拾っている。筆者の場合はこの作業をコード化と呼んでいる。

②データを選ぶ：

コード化されたデータの中から、繰り返し現れている事象はないか、テーマと関わるものがないかなどの観点からデータを選び、集める。筆者の場合はこの作業をカテゴリー化と呼んでいる。筆者の過去の調査では、コードが示すデータの内容、たとえば、学習・家族・将来の夢などで、分けることが多かった。いくつかのカテゴリーができるが、関連の見いだせないものは無理にカテゴリーに入れず、単独のカテゴリーとする。

③データをつなげる：

一つのカテゴリーに集めたデータから、言えることは何かを考える。この段階では、一つ一つのデータが何を意味するかが非常に重要であるが、単にそこにあるデータをつなげるというのではなく、調査全体を見渡し、「研究テーマは何か」、「そのテーマが問題となる研究の背景は何か」、「フィールドを取り巻く状況はどのようなものか」、「先行研究の事例と比較するとどうか」、「理論との関係はどうか」など、さまざまな角度からの問いを考え

合わせながら、カテゴリー内のデータを一貫性のあるストーリーに組み立てることになる。

4) 結論：

カテゴリー内のデータを組み立てた結果、そのデータから「言える」ことが結論となる。だが、前述したように、3段階が一直線に進むわけではなく、コードやカテゴリーが適切だったか、矛盾する組み立てがないかなど、分析過程では何度も、フィールドノーツやインタビューなどの1次データを読み返す。また、収集したデータが多く、いくつかカテゴリーができた場合には、カテゴリーごとの結論と全体のテーマとの関係について、さらに考察を進めることもできる。

3-2. 分析のプロセスの例

ここで、3)③「データをつなげる」段階の例として八木(2007)を紹介する。八木(2007)は、調査協力者が、「いとこのことを『妹』と呼んだ」という事象を、誤用という観点ではなく、多言語使用と感情という観点から分析し、言葉の背景にある協力者の意味世界と「妹」という言葉の関係を考察したものである⁷。調査の協力者と収集したデータ、テーマは以下の通りである。

調査協力者：中国帰国者の A さん。家族と一緒に来日。
データ：フィールドノーツ、インタビュー、日本語教室での学習ノートなど。
テーマ：移住者の生活で何が起きているか。起きている事象と文脈との関係はどのようなものか。協力者はそれをどのように捉えているか。

上記の調査で収集したデータは、分析手順に従い、何度も読み、コード化、次いで、カテゴリー化した。カテゴリーはいくつかできたが、八木(2007)で分析したカテゴリーは、その中の一つ、「中国や中国語に関わるもの」であった。このカテゴリーは、たとえば、協力者が中国での生活や中国のことについて話したインタビューデータ、中国語を話すコミュニティである家族・親族・友人に関わるフィールドノーツのデータなど、協力者の生活に、何度も繰り返し現れている中国や中国語に関わる事象が集まったものであった。

このカテゴリー内のデータを分析している際、いとこのことを筆者に「妹です」と紹介したというデータがあり、最初に、そのデータの意味を考えることにした。その理由は、調査中、「妹です」と紹介された際、「一人っ子と聞いていたが、妹がいたのだらうか」という素朴な疑問をもったからである。その後も調査中、何度か協力者が「妹」のことに触れたので、このカテゴリーの分析では、なぜ、「妹」という言葉を使うのかという筆者の疑問をスタートとして、カテゴリー内の中国や中国語に関わるデータを組み立てていくことにした。

先に、3)③「データをつなげる」段階では、カテゴリー内のデータから「言える」とは何かを考えると述べたが、ここで例としてあげる分析では、なぜ、「妹」を使うのかという疑問の答えが「言えること」になると考え、その答えをデータから探すことにした。その答えは、協力者にとって「妹」とは何を意味するのかという問いの答えでもありと考え、協力者がいとこについて話しているデータや、いとこを含む親族や家族について話し

ているデータを選び、そのデータが何を意味するか、一つ一つ検討した。同時に、親族間の呼称に関する論文や中国帰国者家族を対象とした文献を読んだり、「妹」という呼び名に関する協力者の考えを聞くためにフォローアップインタビューを行ったりして、分析を進めていった。結論を導くまでの作業と思考のプロセスを作業の流れに沿って示すと以下のようになる。

実際の作業

「妹です」を出発点とする。



カテゴリー内で
答えとなるようなデータを探す。



データを選ぶ。先行研究を読む。

分析中の思考

いとこをなぜ「妹」と呼ぶのか。



協力者にとっての「妹」とは何を
意味するのか。



データの意味を考える。

- ・協力者自身のいとこについて話しているデータについて考える。
- ・一般的な中国の「いとこ」について話しているデータについて考える。
- ・家族・親族について話しているデータについて考える。
- ・家族・親族と一緒にいる時のフィールドノーツを読む。
- ・他のカテゴリーのデータも見る。
- ・先行研究：親族間の呼称、中国帰国者家族について書かれている論文を読む。

- ・調査中、聞かなくても家族や親族のことをいつも筆者に話していた。
- ・家族・親族に関するデータは非常に多い。
- ・親族間の行き来が多い。
- ・大学で「生命科学」を専攻するいとこは自慢のいとこなのではないだろうか。
- ・父をほめる話が多い。
- ・父は仕事場の工場で、新人の留学生に仕事を教える。父をととても尊敬しているのではないだろうか。
- ・一緒に働いているおばさんが心配なので仕事を変りたいが、変われない。おばさんも家族のような存在なのではないだろうか。



言えること：協力者の家族・親族に対する思いは強い。いとこは「妹」のような存在。



- ・フォローアップインタビューをして「いとこ」の間違いではないかと聞く。
- ・分析を理論的に支える文献をさらに探す。

- ・協力者の答えは「関係はいとこだけど、感情は妹。」「妹」は家族・親族への感情を表す言葉と言えるのではないか。
- ・話者は感情を表現するために言葉を使い、言葉は話者の感情を形作ると言えるのではないだろうか。



言えること：協力者が「妹」ということばを使うのは、「いところ」という親族間の関係を示すためではなく、いところに対する親しみ、誇りなどの感情、さらに家族や親族への思いや絆を言葉で表現するためであり、協力者自身の中で人とのつながりを形作るためである。

以上、作業と思考のプロセスを作業の流れに沿って示したが、実践研究フォーラム当日のラウンドテーブルで示したように、データの組み立ての際、考察するものについて、時間軸を考慮せずに図式化すれば、以下ようになる。なお、下の図にある「分析の道具としての調査者」というのは、調査中、データ収集や分析などさまざまな場面で、他者である協力者を理解するために使われる調査者の経験や背景知識などのことである。八木(2007)では、筆者にも姉妹がいたことが協力者を理解する一助となっていたと思われる。

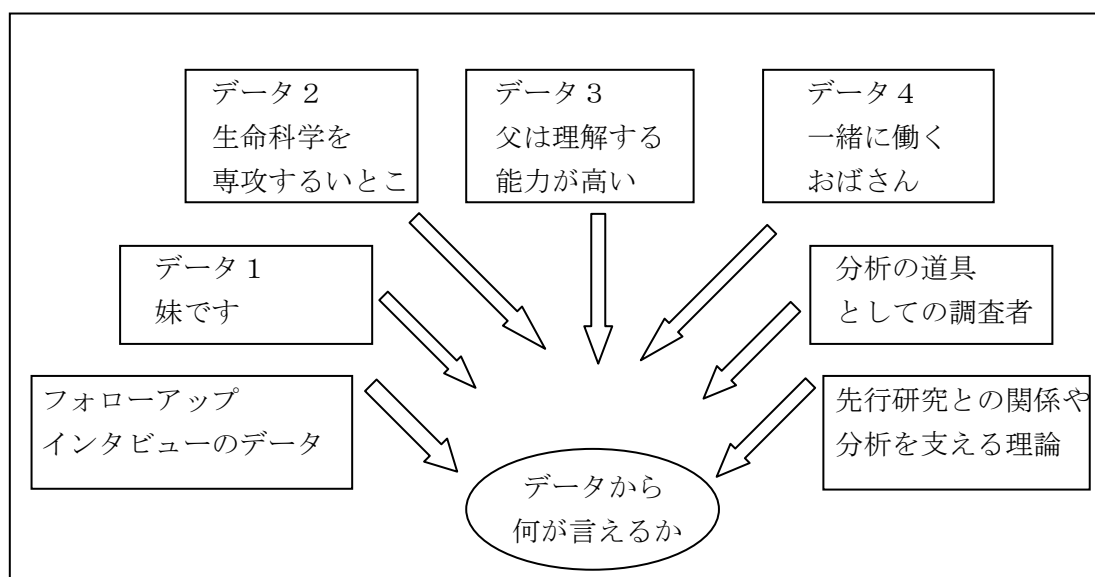


図2：分析のプロセス2

以上、ラウンドテーブルでの手順に従って、エスノグラフィーにおける分析の方法を紹介した。ここであげた例は、分析の一例であり、実際に書かれたものとしてのエスノグラフィーに仕上げるには、さらに多くのデータやフィールドの状況、先行研究、理論、研究テーマとのすり合わせや検証が必要であることは言うまでもない。

4. まとめ

近年では、日本語教育研究の分野においても、質的調査や分析を用いた研究を見かけるが、研究全体から見れば、まだまだ十分に認知された研究方法とは言えない。地域の日本語支援という多文化社会の最前線にいる支援者が、移住者の現実や自らの実践の意味を記述し発信していくことによって、人が現に生きている社会的世界を物語の様式で読み手に提供し、書き手から読み手へと理解が広がり、そして異なる背景を持つ人々が共に暮らす社会を築いていこうとする行動へとつながり、多くの研究成果が社会に還元されることを

期待している。

注

- (1) この二つの様式は、どちらかの様式が認識の方法としてより優れているということではなく、何を知りたいかによって、アプローチの仕方が異なるということである。
- (2) エスノグラフィーは質的調査法の一つだが、質的調査法にもさまざまな研究方法があり、そのすべてが物語様式を採るとは言えない。
- (3) Bronislaw Malinowski。ポーランド生まれの文化人類学者。トロブリアンド諸島でフィールドワークを行った。
- (4) 「真実とは何か」や「研究者の立ち位置」、「表象の問題」など、いずれも質的研究では重要な問題であり、議論が必要であるが、本稿は調査法の紹介に主眼があるため、詳細は割愛する。
- (5) 本ラウンドテーブルでは、art media K.Y.の協力によりドキュメンタリー映画「ペルマネンシア・この国にとどまって」(2006年、エリオ・イシイ監督作品)の一部を視聴致しました。art media K.Y.のご理解とご協力に記して感謝致します。
- (6) データは、フィールドノートやインタビューの文字化資料などの元のデータを、1次データと呼び、原稿を書く際に引用するため、誤用を訂正したり、フィールドノートのわかりにくい点を説明したり、補足したりしたデータを2次データと呼んで区別している。
- (7) 内容の詳細については、八木(2007)を参照されたい。

参考文献

- (1) ブルーナー, J.S. (1998) 『可能世界の心理』 田中一彦訳 みすず書房 (Bruner, J.S. (1986) *Actual minds, possible worlds*. Cambridge: Harvard University Press.)
- (2) 八木真奈美 (2004) 「日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築」『質的心理学研究』3号,157-172
- (3) 八木真奈美 (2007) 「多言語使用と感情という視点からみる、ある『誤用』-定住外国人のエスノグラフィーから-」『リテラシーズ』第3号,33-46
- (4) 八木真奈美 (2010) 「在日外国人とその社会的文脈に関する一考察-ある中国帰国者のケース」『多文化社会と留学生交流』14号,81-94
- (5) Atkinson, P. (2001) Editorial introduction. In P. Atkinson, C. Amanda, S. Delamont & J. Lofland eds., *Handbook of ethnography* (pp.1-7). London: Sage.
- (6) Brewer, J. (2000) *Ethnography*. Buckingham: Open University Press.
- (7) Denzin, N. K. (1997) *Interpretive Ethnography: Ethnographic practices for the 21st century*. Thousand Oaks: Sage.
- (8) Geertz, C. (1973) *The Interpretation of cultures: Selected essays*. New York: Basic Books.
- (9) Harklau, L. (2005) Ethnography and ethnographic research on second language teaching and learning. In L. Hinkel eds., *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning*. (pp.179-194). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

- (10) Polkinghorne, D. E. (1988) Narrative knowing and the human sciences. Albany, NY: State University of New York Press.
- (11) Rabinow, P. (1985) Discourse and power: On the limits of ethnographic texts. *Dialectical Anthropology*, 10, 1-13.
- (12) Tedlock, B. (2000) Ethnography and ethnographic representation. In N. Denzin & Y. Lincoln eds., *Handbook of qualitative research*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- (13) Wolcott, H. F. (1999) Ethnography : a way of seeing. Walnut Creek, CA: AltaMira Press.